

【九州大学大学院芸術工学府 芸術工学専攻（博士後期課程）】（2022年度以降入学者）

1) ディプロマ・ポリシー

教育の目的

芸術工学専攻において養成する人材像は、九州大学教育憲章に定める教育の目的と4つの原則（人間性の原則、社会性の原則、国際性の原則、専門性の原則）を踏まえ、人類が直面する課題に真摯に向き合うため、科学技術と芸術的感性を融合する「技術の人間化」の理念を継承しつつ、「モノ・コト・ビジョン」へ拡大する新しいデザイン領域に対する意識と人文、社会、自然にまたがる広い知識を基盤とする「高次のデザイナー」である。

複雑化する現代社会においては、文化に対する深い理解を備え、対象に対する正しい評価、人間に適合したモノ・コト・ビジョンの創出等を高度に推進できる専門家が求められている。

芸術工学府芸術工学府（博士後期課程）では、特定の分野に限定されることなく芸術工学の視点に立脚し、人間に適合した環境・製品の創出、各種情報の高品質化、芸術文化の創造を実現できる人材の養成を目的としている。芸術工学およびデザイン学領域の中で、学生個人ごとの領域を設定して、芸術、科学、技術の高度かつ先端的な知識を修得させ、その知識に基づいた基礎研究、応用研究、コンテンツ制作、実践を行う場を提供する。

芸術工学府芸術工学専攻（博士後期課程）においては、「芸術工学」に関する十分な専門的知識と特に優れた技術を獲得することで成果を達成し、自ら新しい課題を設定、解決する国際的水準の、独自性のある研究成果を挙げた者に対して、「博士（芸術工学）」の学位を授与する。

また、芸術工学に関する研究のうち、その成果の中で特に技術等に関する研究が工学的に見て十分な成果を達成したと指導教員グループが認める者に対しては、「博士（工学）」の学位を授与する。

参照基準

Subject Benchmark Statement (UK)

Anthropology, Psychology, Biosciences, Computing, Mathematics, Statistics and Operational Research, Music, Engineering, Art and Design, Architecture, Business and Management

RCA Quality Handbook (2014-2015)

RCA Postgraduate Art & Design (2017)

大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準

土木工学・建築学分野、地域研究分野、歴史学分野、農学分野、言語・文学分野、機械工学分野、数理科学分野、地域研究分野、

情報学分野、哲学分野、サービス学分野

学習目標

- A. (主体的な学び・協働) 芸術工学及びデザイン学の領域及び関連分野を含む諸科学の全般にわたる深い専門的知識と豊かな教養を背景とし、自ら問題を見出し、創造的・批判的に吟味・検討しながら、幅広い分野の課題に実践的に取り組み、デザイン学領域を先導していくことができる。
- B. (知識・理解) 芸術工学及びデザイン学領域に関する卓越した専門的知識及び技能を有し、すぐれた学問的素養と卓越した論理的思考力、柔軟な想像力や豊かな表現力を兼ね備え、自らの専門性にとどまらない普遍的なデザインへのアプローチ手法、方法論を十分に説明することができる。
- C. (能力)
- C-1. (適用・分析：知識・理解の応用) 様々な種類の課題解決のために、芸術工学分野の深い専門的知識を統合して、さらに異なる分野、社会、人々と協働しながら、問題を分析、解釈し、制御あるいは構成することができる。
- C-2. (創造・評価：新しい知見の創出) 専門知識を総合的に活用しながら、社会の複合的な課題を提起し、主体的・積極的に研究を遂行して、解決のための実践的な方向性を示すことができる。
- D. (実践：知識・理解の実践的場面での活用) 芸術工学及びデザイン学に対する鋭い感性と、他分野との融合も視野に入れた高度な専門的知識を兼ね備え、総合的な設計能力をもって、科学技術と芸術的感性の融合を推進し、グローバルな世界で豊かな生活の実現に貢献することができる。

2) カリキュラム・ポリシー

芸術工学府のもうひとつの重要な教育上の使命は、デザイン分野を先導する博士の研究者の養成である。このため博士後期課程では、デザインに関する修士課程レベルの知識、技術を基盤としつつ学術的に深化を進め、大学院の教育課程の集大成である博士論文を執筆し、アカデミック、企業など、所属を問わずデザイン分野で世界を先導する研究者を養成するためのカリキュラムを構成する。

現在も拡大を続けているデザイン分野に対応した教育として、「研究指導科目」により諸科学の全般にわたる広く深い知識を提供する(学修目標A、B)。「論文作成科目」では自らが研究を企画し、そのために必要な調査分析の計画案を他の学生教員と共有することから、狭い専門性に閉じることをないようにコースの垣根をなくして自らの問題解決能力と創造的能力を高めるために自主性を重んじた履修システムを構築する(学修目標B、C)。さらに、その批判的検証が実際の博士論文研究につながり、独立した研究者としての経験と能力

を涵養することになる（学修目標B、C、D）。

また企業の研究所に勤務する社会人や優秀な留学生など幅広く優秀な学生を受け入れるため、全ての講義において英語対応とし、国際通用性のある学術リテラシーを涵養し、所属する学生の将来へ向けたネットワーク構築も可能にする魅力ある教育課程を編成する。異分野の学生と研究討議を行う機会を確保するためにセミナーへの参加を義務付けるなど、専門外の考え方と課題解決法の学びとコミュニケーション力の向上により他者との協働能力も育成する。

【コースワーク】

博士後期課程における主要な授業科目は、「論文作成関連科目」および「研究指導科目」である。これに加えて、単位化はしていないが博士後期課程の主要な要素である博士論文研究がある。これらの科目及び研究活動が複数指導の下、有機的に関連していることが特徴である。修了には、論文作成関連科目4単位、研究指導科目6単位の合計10単位以上を履修することが必要である。

博士論文研究では、それまで大学院生が通過してきた学部及び大学院教育をまとめ、授業や多角的な視点から課題を設定し、自ら研究を遂行する過程を学ぶ。そして、学位論文にそれらの研究活動をまとめることで、修了後、独立した研究者として活動する能力を醸成する。なお、優れた業績を上げた者については、修業年限を短縮することができる。

【研究指導体制】

研究指導体制としては、博士後期課程を1専攻とすることによって学府全体で臨む体制とすることを基本思想とし、それぞれの学生に対して「研究指導グループ（主指導教員＋副指導教員による3～5名で構成）」を構築する。副指導教員は主指導教員とは別の専門性を持つ教員を当て、学生の研究が分野融合的になるように進める。さらに、後述するように、学生の研究の進展に合わせて必要とされる指導教員を追加変更することも可能とする。この仕組みによって、従来実施されてきたような主指導教員1名＋副指導教員2名といった固定的かつ既存・隣接の専門領域の枠組みにとらわれない、領域横断的指導を可能とし、研究を実質的に深化・機能させることができる。

前述のように、デザインの対象及び方法論の系統は多岐にわたり、実験・物理モデル構築や数式処理・解析などの理工系、綿密で幅広い現場・フィールドでの調査、史料・文献調査、作品制作を通しての理論、これらの横断研究など幅広い形式が考えられる。いずれの形式の観点からみた場合でも、「研究指導グループ」により博士後期課程における研究の質を保証することが可能となる。

この「研究指導グループ」の教員は、入学後、正式な指導教員として学務専門委員会が承認する。また、その後の研究の深化・拡大に伴い、「研究指導グループ」全員の同意を得て追加・変更可能とする。この際も学務専門員委員会の承認事項とする。これは、研究が極端

な蛸壺化に陥ることを防ぎ、かつ、指導の透明性・客観性を担保するものである。

また、九州大学他部局、及び国内外の他大学・他研究機関の研究者をこの「研究指導グループ」に加えることを容易にするため、オンライン指導等を積極的に活用する。

【学位論文審査体制】

「研究指導グループ（主指導教員＋副指導教員による3～5名で構成）」とは別途、博士学位論文等調査委員会を設置し、委員会により論文審査を行う。また、他大学・他研究機関の専門家との連携により、国内外を含む外部論文審査員の参画を推進する。

さらに、博士論文予備審査は、より質の高い研究論文とするため、所定の単位履修修了以前にも可能とする。具体的には、参考論文等の投稿・審査が完了している場合、博士後期課程在籍3年目当初（4月期入学であれば在籍3年目の4月）での予備審査を行い、最終論文提出までの修正期間を確保し、より完成度を高めるものとする。

また、国内外を含む外部論文審査員の参画を鑑み、予備審査・本審査ともオンライン審査等を推進する。外部論文審査員は従来通り、学務専門委員会及び教授会での審議を経て決定する。オンライン審査は、一定のセキュリティを確保した上で、専攻共通のルールを構築する。

【継続的なカリキュラム見直しの仕組み(内部質保証)】

博士後期課程における学修の成果は以下のアセスメント・ポリシーに基づいて評価し、その結果をもとに、授業科目の教授方法などに改善の必要がないかを学府内学務専門委員会において検討することで、教学マネジメントを推進する。

【アセスメント・ポリシー】

博士後期課程においては、自らの研究を展開し研究者として自立して研究活動を行う能力と、その基礎となる豊かな学識を養うことが求められている。そのような能力向上を、学生と指導教員グループが共に確認するため、「博士後期課程研究経過報告」の実施を行うこととする。これにより、研究の到達状況を把握・分析し、指導教員グループは研究状況を把握して的確な指導を行う。

学生は毎年1回以上、研究経過発表を実施する。研究経過発表とは、関連学会等における口頭発表、学術雑誌への論文投稿、コンペティション等への出品、企画書の作成などの制作である。なお、学外における発表が見込めない場合、学内において「研究指導グループ」を含む第三者が聴講する形態の「学内公開発表会」を計画・実施し、そこで自身の研究を発表することとする。

上記の研究経過発表の状況を「研究経過報告書」にまとめ、発表方法に応じて下表1に示す資料を添えて、指導教員グループが確認の上、学府長に提出する。

表 1：発表方法と添付資料

研究経過発表	添付書類
関連学会・国際会議等における発表	梗概集
学術雑誌への論文投稿	投稿論文の写し、または論文概要
上 2 項以外の制作・研究業績(作品、演奏、ディレクション、著書など)	報告書(制作・研究業績など)
「学内公開発表会」による研究状況の発表	報告書(配布資料・発表スライドなど)

3) アドミッション・ポリシー

求める学生像

博士後期課程では、九州大学が求める学生像を踏まえ、本学府の理念である「技術の人間化」に基づき、技術を人間生活に適切に利用するための道筋を設計でき、指導的立場を果たし得る研究者の養成を目的とし、修士課程入学希望者に求める態度や資質に加え、次のような素養を持つ学生を求めている。

- ① 卓越した論理力と思考力を有し、自らが課題を発見し、それらを解決しうる高い能力を有する。
- ② 専門分野及び隣接分野における学術研究に対する高い関心と目的意識、かつ、倫理観を身に付ける姿勢を有する。
- ③ 世界が抱える課題に関心を持ち、国際的水準の研究の推進と国際的な場で研究成果を発信できる能力を備えている。

入学者選抜方法との関係

1) 入学試験前の事前相談と仮指導教員グループの形成

博士後期課程での高度な専門性と自立した研究者を育成する使命責任を果たすため、入学者選抜試験の方法は提出された書類や限られた時間による面接審査だけにとどめず、指導担当予定者と志願者の間で事前の研究計画と研究指導体制等の確立を行う必要がある。

入学志願者は事前に指導希望教員と連絡をとり、博士後期課程での担当と指導の相談を行う。その際、必要に応じて研究活動実績リスト、研究計画などを提示する。

相談を受けた教員はこれらの書類を確認、志願者との相談を行い、入学志願者の研究推進能力、資質、計画の実現可能性などを確認する。この段階で、上記①～③の要件に関するプレスクリーニングを行うことになる。指導可能であると判断できた場合、あるいは若干の研究計画修正等によって指導可能となると判断できた場合は、在学予定期間での研究計画を立てルートマップを作り、志願者とともに検討を行う。

また、出願のための研究計画書等へのアドバイス等を行う。同時に研究の専門性や方向

性に合わせて在学中の責任を負う指導教員グループを仮組織し、これらの情報を共有する。指導教員グループ構成の際には在職可能期間等も考慮し、少なくとも1名以上の主指導予定者が学位論文審査時まで引き継がれているようにする。指導可能性の判断及び仮指導教員グループの構成の後、志願者は出願を行う体制とする。

2) 入学試験の方法

具体的な博士後期課程の入学試験においては、これまで設けていた選抜区分（一般選抜、社会人選抜、留学生選抜）を一本化する。また、入学試験を年2回（6～7月頃、12～1月頃）実施し、春入学及び秋入学を指定して受験できる制度を全面的に導入する。これにより優秀な海外からの留学生や実務経験が豊富な社会人学生に対応する。

選抜は書類選考と面接試験（口頭試問）により実施する。

書類選考では学業成績、英語成績証明書、修士学位論文（修士課程修了見込みの者は研究経過報告書）、博士研究計画書、研究・業務実績書、ポートフォリオ等を用いる。これにより、①知識・技能の能力を確認する。

面接試験では、これまでの研究成果及びこれからの研究計画等について説明させる。そして、芸術工学に関連する専門知識のほか、人文、社会、自然にまたがる知識や、論理的な思考能力、芸術的感性、自己・社会分析力、柔軟な思考力・対応力、創造的意欲、行動力等を総合的に評価する。面接試験は、志願者が研究指導を希望する「指導教員グループ」から構成された面接委員による質疑によって行われる。この面談で、②思考力・判断力・表現力に関する能力、さらに③主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度を確認する。

志願者には出願前に主指導希望教員と相談するよう指示し、研究計画の実現可能性や希望指導教員の研究の専門性や方向性を確認することを求める。一方、主指導希望教員はその機会を通して志願者の研究能力を確認するとともに研究計画を精査し、指導可能かどうかを判断する。これにより、「指導教員グループ」による研究指導体制を事前に準備し、円滑に研究が開始できる体制につなげる。ここで③に示す国際的水準の研究が推進可能であるかの確認も行う。

芸術工学府芸術工学専攻 博士後期課程 カリキュラムマップ

科目区分

凡例 科目区分

論文作成関連科目

研究指導科目

(再掲は薄色表示)

(再掲は薄色表示)

論文作成関連科目

研究指導科目

学修目標			D1				D2				D3			
区分	領域	修士課程	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q
実践		D. 芸術工学及びデザイン学に対する鋭い感性と、他分野との融合も視野に入れた高度な専門的知識を兼ね備え、総合的な設計能力をもって、科学技術と芸術的感性の融合を推進し、グローバルな世界で豊かな生活の実現に貢献することができる。	リサーチ研修I	リサーチ研修I										
			リサーチプロジェクトI			リサーチプロジェクトII			リサーチプロジェクトIII					
評価・創造		C-2. 専門知識を総合的に活用しながら、社会の複合的な課題を提起し、主体的・積極的に研究を遂行して、解決のための実践的な方向性を示すことができる。	リサーチ研修I	リサーチ研修II										
			リサーチプロジェクトI			リサーチプロジェクトII			リサーチプロジェクトII					
適用・分析		C-1. 様々な種類の課題解決のために、芸術工学分野の深い専門的知識を統合して、さらに異なる分野、社会、人々と協働しながら、問題を分析、解釈し、制御あるいは構成することができる。	リサーチ研修I	リサーチ研修II										
			リサーチプロジェクトI			リサーチプロジェクトII								
知識・理解		B. 芸術工学及びデザイン学領域に関する卓越した専門的知識及び技能を有し、すぐれた学問的素養と卓越した論理的思考力、柔軟な想像力や豊かな表現力を兼ね備え、自らの専門性にとどまらない普遍的なデザインへのアプローチ手法、方法論を十分に説明することができる。	リサーチ研修I	リサーチ研修II										
主体的な学び・協働		A. 芸術工学及びデザイン学の領域及び関連分野を含む諸科学の全般にわたる深い専門的知識と豊かな教養を背景とし、自ら問題を見出し、創造的・批判的に吟味・検討しながら、幅広い分野の課題に実践的に取り組み、デザイン学領域を先導していくことができる。	リサーチ研修I	リサーチ研修II										
区分	領域	修士課程	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q
学修目標			D1				D2				D3			
アセスメント・プラン			<p>博士後期課程においては、自らの研究を展開し研究者として自立して研究活動を行う能力と、その基礎となる豊かな学識を養うことが求められている。そのような能力向上を、学生と指導教員グループが共に確認するため、「博士後期課程研究経過報告」の実施を行うこととする。これにより、研究の到達状況を把握・分析し、指導教員グループは研究状況を把握して的確な指導を行う。</p> <p>学生は毎年1回以上、研究経過発表を実施する。研究経過発表とは、関連学会等における口頭発表、学術雑誌への論文投稿、コンペティション等への出品、企画書の作成などの制作である。なお、学外における発表が見込めない場合、学内において「研究指導グループ」を含む第三者が聴講する形態の「学内公開発表会」を計画・実施し、そこで自身の研究を発表することとする。</p> <p>上記の研究経過発表の状況を「研究経過報告書」にまとめ、発表方法に応じた資料を添えて、指導教員グループが確認の上、学府長に提出する。</p>											